

30amD-178

現場薬剤師の漢方薬に対する意識調査—香蘇散の使用実態と薬剤師の認知度—
○石村 博史¹, 海保 房夫¹, 佐藤 将嗣²(¹東京理大, ²辻中病院薬)

【背景・目的】 薬学教育において漢方教育が標準化されている昨今、薬剤師による漢方薬の服薬指導の重要性は増してきている。漢方薬の中でも香蘇散は一般的に風邪薬として知られているが、他にも、胃腸症状、蕁麻疹、神経症など風邪とは関連が少ない症状に用いられることもあるため、現場薬剤師は服薬指導の際に戸惑うこともある。そこで演者らは香蘇散の認知度を目安に漢方薬に対し現場薬剤師が今後どのように漢方薬を捉えるべきなのかアンケート調査から検討した。

【方法】 2012年8月～11月に現場薬剤師109名を対象にアンケート調査を行った。アンケートは、香蘇散の認知度、漢方薬に対する捉え方など全8項目とした。

【結果・考察】 薬剤師全109名中、香蘇散の薬効を1つ以上回答した薬剤師はわずか33.0%であった。この結果について他のアンケート項目からその原因を解析した。その結果、漢方薬について興味があると回答した薬剤師は85.3%であるが、苦手意識が高いと回答した薬剤師は80.7%であった。また、処方解析ができないと回答した薬剤師は56.9%であった。香蘇散の認知度の低さはこのような漢方に対する捉え方を反映しているものと推察できる。また、他のアンケート項目で、漢方に必要な情報は何かという質問に対し、効能・効果を挙げる薬剤師が62.4%であった。しかし漢方に対する知識を持った薬剤師の場合、効能・効果を選ぶ代わりに構成生薬などの情報を選ぶ割合が高かった。

漢方薬は生薬の複雑な組み合わせから成り立っているため構成生薬の情報なしで効能・効果にこだわると漢方処方全体の全体像を理解するのが難しい。漢方薬に興味はあるが苦手という結果はこのようなことのためであって、構成生薬など他の情報に着目する必要があることが示唆された。